



英語 e-learning システムの運用

豊島 孝之¹

昨年度学長裁量教育支援経費により e-learning 事業推進室が導入した ALC 社の NetAcademy 「英文法コース」の試験運用について、英語教室でのサブ管理者としてのこれまでの準備・問題点等、所感を述べてみたい。

1 導入準備

導入にあたり、e-learning 事業推進室より情報工学部共通講座英語教室に対して教材選定及び利用促進の協力要請があり、一昨年秋より今年度前期からの試行運用を目指して協議を重ねてきた。対費用効果、利用促進方法等を考慮しながら、情報工学部 1 年次必修英語科目前期開講の II、後期開講の IV の成績評価に加味する課題として導入する事とし、入学者の確定を待って、新入生全員のアカウントと初期パスワードを準備することにした。

ここで問題となったのは新学期開始と共に施行されることとなった、いわゆる「個人情報保護法」の壁である。新入生の学籍番号と氏名のリストを受領するのに、申請書が必要となり、また新入生の便宜に配慮して英語 e-learning システムのアカウントを情報科学センターと同一にすることとした為、その情報も必要となった。e-learning 事業推進室がアカウント設定と初期パスワード付与作業を行ってくれたが、それらの情報を学生各個人にどうやって伝えるかが問題となった。結局、学生別に印字切断した紙短冊を各授業で手配布してもらうことにした。

2 運用開始

運用開始後問題になったのは、キャンパス内で e-learning 自習課題をこなす為には、システムの関係上、マイクロソフト社 Windows OS の DirectX 技術が使える環境が必要であり、全学科共通で利用可能な開放 PC としては、リカレント講義室、マルチメディア講義室、図書館にあるものに限られることになり、利用するには情報基盤室管理の別のアカウントとパスワードが必要である。それらの取得は web を通して自動化されているが、情報科学センターのアカウントとパスワードで認証する様になっている。英語教室と e-learning 事業推進室を問い合わせ先として明示しておいたにもかかわらず、図書館職員や情報科学センターのスタッフにも問い合わせが頻発した様で、御迷惑をかけたが、適宜対応して下さり感謝している。

¹情報工学部 共通講座 助教授、

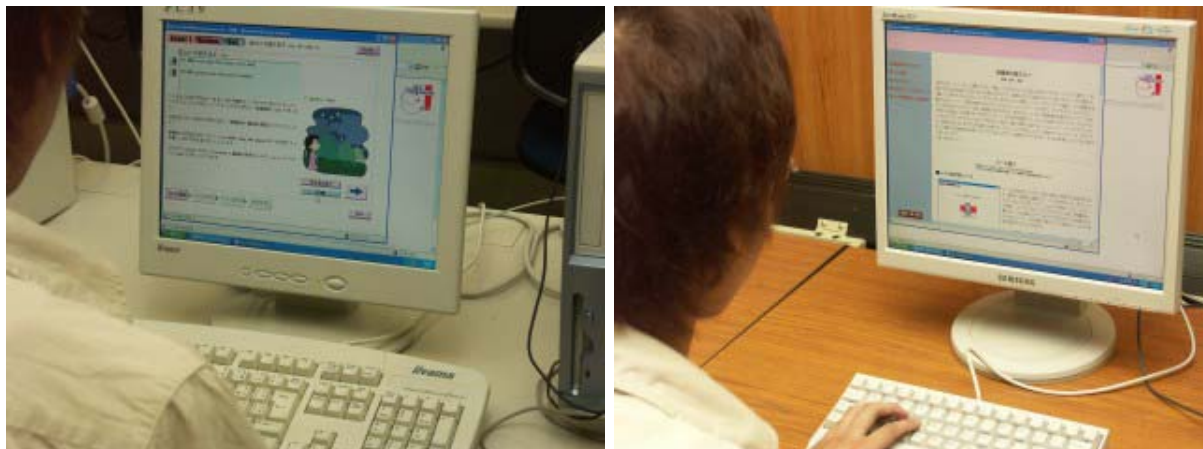


図 1: ALC 利用画面

多かった問い合わせは、「ログインできない」という申し出と、「アカウントと初期パスワードの配布紙短冊を紛失してしまった」というものである。大学環境、ネット・ワーク環境への不慣れから、新入生にとっては、情報科学センター、情報基盤室管理の PC、英語 e-learning システムの 3 つの異なるアカウントとパスワードの関係がすぐに飲み込めなかった者も少なくはなく、また英語 e-learning システム用に用意した初期パスワードのアルファベット小文字の“ l ”と数字の“ 1 ”を間違えるという初歩的な問題で、文字の読み違いも少し想像力があれば気付くことができるたぐいのもではある。アカウント情報の紛失にいたっては、ネット・ワーク、e-learning 以前の問題ではあるが、最近の学生気質を考えると、今後も増加することはあっても減りはしないであろう。

この e-learning システムでは、アカウントの設定はシステム内部でスタティックに行う必要があり、データ・ファイルを用意して一括でインポートすることは可能だが、動的に他のサーバー類を参照する等の機能は備えていない。LDAP 等を利用して、情報科学センターや情報基盤室管理の PC と単一のアカウント管理が可能であれば、上記の様な問題は軽減されるであろう。

学期後半にはいっても全体的に課題進捗が遅く、授業を通じて注意を喚起したが、キャンパス内でのアクセスについては、図書館で利用可能な PC は 10 台しかなく、リカレント講義室については、前期は教職免許公開講座や一般授業で使用できない時間帯が多く、また 1 年次は授業数も多いため中々利用できない等の問題が浮上した。対象新入生 434 名には絶対的な PC 数はやはり十分ではなく、リカレント講義室、マルチメディア講義室については、開放時間の延長をお願いすることになった。中にはネット・ワークに興味をもって、学内情報コンセントや無線ホット・スポットにより個人のノート PC を持参して利用する者や、自宅から VPN アクセスにより情報科学センター経由で課題に取り組んだ学生もいた様ではある。

環境面での対応が進み、学生の利用も伸びてきたが、今度は数名の学生が「どの答えを選んでも不正解と表示される」と報告してきた。問題箇所の意味な報告で、我々教員側が e-learning 課題を行うはめになったが、実際に利用してみると、数カ所ソフト・ウェア上の欠陥 (バグ) が判明したので、ALC 社に報告し、その後ソフト・ウェアの修正更新が施された。その際分かったことは、当初想像していた程問題の種類はあまり多くなく、提示順序をかえるだけで同一問題を何度も使い回している等、単に学生



図 2: 図書館端末利用風景

に課題として課していただけでは分からなかった教材としての質の面も把握できたのは今後の指導上参考となった。

3 前期授業終了後

先に述べた様に、今回の e-learning 教材は必修英語科目前期開講の II，後期開講の IV の成績評価に加味する課題として導入したが、導入決定時には教材自体の最終版が完成しておらず、最終的な教材の中身を確認せずに導入するにはリスクが伴ったこと、またここ数年の試行錯誤を経て 1 年次必修英語科目の成績比重はほぼ決まっていたので、課題として期末成績に加味する比率は、10%とした。

実際期末成績に加味するには、今学期については、課題範囲をこなした割合で期末成績に反映させ、完全に指定範囲を終えた場合に 10%分満点をあたえることとした。これは、利用者がある単元の開始及び終了を指示した間の時間総数とアクセス回数しかシステムの履歴情報には残らないからである。この点について、導入前に ALC 社の他教材によるデモで承知はしており、それら履歴情報は CSV ファイルで出力できると聞いていたのだが、CSV でもなぜかコロン切りされたデータ・ファイルであり、そのままではデフォルトでエクセル等の表計算ソフトにインポートできず、将来自動集計のためにはシステム・レベルでのスクリプトで変換するなどの必要があることも判明した。

本来、成績に加味するには、正答率や正 / 誤答回数・頻度等の情報の方が学習者の能力・努力を反映するためには重要で、課題が何パーセント終了したかという情報は、さほど意味がない。また、課題によっては、いわゆる「モンキー・ゲス」で何も問題を見ずに選択トグル・チェック・ボックス / ラジオ・ボタンをチェックしてゆけば、進捗率だけは稼げるのである。



図 3: リカレント講義室端末利用風景

4 後期授業準備

後期での必修英語 IV での利用の準備に入り，前期英語 II を不合格となり再履修となった者には，英語 IV での課題範囲に加えて，再度前期の課題範囲を課すことにしたのだが，特定のアカウントの履歴情報だけを再設定 / 初期化する方法が用意されていないことも分かった．結局，再履修者全員のアカウントを一旦削除し，新アカウントとして再度設定し直した．

また，上級生で英語 II を合格していない再履修者にも同じ課題を課すことにしたのだが，その為のアカウント設定に際し，各アカウントのアトリビュートが 3 フィールドしか用意されていないことが問題となった．データ・フィールド数が固定されており，再履修者とそうでない者の区別が直接アトリビュートとして設定できない．将来的な全学利用を目指して導入時に「情報工学部」という部局情報に 1 フィールド，入学年度（学年）とクラス名（学科とレベルによる）の計 3 フィールド使いきっており，結局対象者のクラス名の末尾に「*」を付し，履歴ファイル・エクスポート後，インポート側の表計算ソフト等でのソート・抽出で対応することにした．

5 所感

英語 e-learning 教材と言っても，基本的なテスト問題が入っており利用管理者が教材としての内容を組み立て追加していく，いわゆるオーサリング・ソフト形式のものや，アカウントを購入して業者のサーバーにアクセスして利用するもの，工業英語や TOEIC 対策等の教材等々，各社から多種多様なものが出されている．オーサリング・ソフト形式のもので，独自の教材が開発できれば最もよいのであろうが，それだけの資源が必要になってくる．

また，教材のタイプとしては大別していわゆる「問題集」的なものと「教科書」的なものに二分され



図 4: ALC サーバ

るが、いずれのタイプでも開発側は授業中の利用を想定しているらしい。従って履歴ログの情報内容等は前述した様に課題として点数化するには不向きなものしか残らない。しかし授業中の利用には、教員側に相当の熟練が必要である。これは e-learning に限らず前世代の LL 教室や CALL システムによる授業でも同様で、実際にそれら設備の機能を 100%生かしかれた英語授業が大規模になされているという話しは聞いたことがない。ALC 社からも数々のセミナー等、他大学での運用事例や授業での活用研修の様な企画案内がしばしば届き、ある意味システム保守契約として操作方法のブリーフィングでも授業での利用方法についての簡単な示唆は含まれている。

運用、データ管理の面からは未だ発展途上にあり、授業中の利用を考えても、課題としての利用でもネット・ワークの特性を生かきったシステムとしては未完成であり、利用者の能力向上の観点からは従来メディアの教材ほど洗練されていないというのが率直な感想である。ALC 社も我々の感想やニーズ等を積極的に聴取しており、次期バージョンを開発中だそうだ。洗練されていた教材にネット・ワーク特性がうまく統合されれば、より効果のある教材となる可能性は秘めている。

また今年度導入の教材は、ALC 社が従来メディアで得意であった中・上級者向けの教材ではなく、低レベルの学生を対象とした自習教材として選んだものであり、その意味では効果があったのではないかと考えている。近年の問題は、入学者の英語能力の差が大きく、例えば今年度から新入生全員にオリエンテーション時に TOEIC を受験させクラス分けに利用しているが、留学生を例外として最高 630 点から最低 120 点までの分布で、平均は 358 点である。200 点に満たない学生等は中学レベルの英語ができ

解説 (e-ラーニング特集)

ず、また過去には英語を学校教育として履修したことのない留学生もいた。その様な学生には正規授業以外に補習クラスを設けたり、オフィス・アワーを利用して個人教授を行ったり対応してきたが、先に e-learning 課題をやらせることで、実際学生がどの様に課題をこなしたか把握でき、教員側の省力にはなる。今後は、自習・課題・授業中の利用との組み合わせで最大限の有効利用を図ることが望まれる。